

消化器外科・小児外科

● スタッフ（2020年10月1日現在）

診療科長 土田 明彦
医局長 太田 喜洋
病棟医長 瀧下 智恵
外来医長 真崎 純一

医師数 常勤 32 名
非常勤 18 名

● 診療科の特徴

当科では成人の消化器疾患と、小児外科を扱っている診療科です。消化器疾患を臓器ごとに上部（食道・胃）、下部（大腸・肛門）、肝・胆・膵の各グループに分け、また小児外科グループも含め、最先端の医療を提供できるように診療・研究を行っています。

食道癌については、早期癌に対して消化器内科と合同で内視鏡下粘膜下層切開剥離術（ESD）を行い、進行癌にはロボット支援手術を含めた胸腔鏡下食道切開術を行っています。また、手術療法のみならず、切除不能食道癌に対する根治的化学放射線療法（DCF-R）を行い、良好な成績を得ています。

胃癌に関しては早期癌及び進行癌の一部に対して腹腔鏡下胃切除を行っています。進行癌には、新規抗癌剤による治療を行っています。他施設共同研究に参加して新規治療方針の決定に貢献しています。進行癌に関しては治療前の腹腔内の転移などを確認するための審査腹腔鏡手術を行うこともあります。高度な進行癌に対しては手術前に抗癌剤を投与し、その後に手術を行うこともあります。胃粘膜下腫瘍に対しては、消化器内科と合同で腹腔鏡・内視鏡合同手術（LECS）も行っています。腹腔鏡下減量手術を開始いたしました。

肝切除・膵切除例は癌の制御を目指し手術だけでなく新規抗癌剤などによる術後補助療法を積極的に行うとともに、その副作用を患者血液の遺伝子解析を利用して予測する研究も行っており治療に役立たせております。特に膵癌に対しては、近年症例数が増加しており、ロボット手術支援を含めた鏡視下手術を積極的に取り入れております。

結腸癌・直腸癌手術の約90%を、ロボット支援手術を含めた腹腔鏡下に施行し良好な成績を得ています。また肛門の機能温存手術（自律神経温存手術・内括約筋のみ合併手術など）を行い、患者様のQOLに貢献しています。本年より炎症性腸疾患（IBD）に対して消化器内科と合同でIBDセンターを立ち上げ、内科的治療・外科的治療を積極的に行っております。

小児外科領域は食道裂孔ヘルニア・Hirschsprung病・鼠径ヘルニアに対して腹腔鏡下手術を導入し良好な成績を得ています。また小児泌尿器科的疾患も積極的に手術を行い良好な成績を収めております。

● 診療体制と実績

全体の手術総数は782例でした。例年750～950例で推移しております（図1）。2018年4月より消化器癌に対するロボット支援手術が保険収載されましたが、当科では以前より食道癌・膵臓癌・大腸癌に対して臨床試験を経てロボット支援手術を導入し積極的に手術件数を増やしています。

食道癌の切除例（手術・内視鏡的切除）は年間51例で、胸腔鏡下食道切除術を含む手術は31例で、早期癌に対して行われた内視鏡下粘膜下層切開剥離術は10例でした（図2a）。

胃癌の切除例（手術・内視鏡的切除）は年間64例で、腹腔鏡下手術は23例でした（図2b）。腹腔鏡手術の割合は年々増加傾向にあります。

肝切除・膵切除例はそれぞれ年間40例と143例です。特に膵臓疾患については近年増加傾向にあり、腹腔鏡下手術を積極的に取り入れております（図2c,d）。

結腸癌・直腸癌の切除例は年間211例です。また、かねてから手術症例のうち70～85%の症例に対して腹腔鏡下手術を取り入れており、その割合は年々増加傾向にあり、良好な成績を得ております。IBDに対する外科治療は10例でした（図2e）。

小児外科領域は年間125例の手術を行っています。2011年からは小児泌尿器科的疾患も積極的に手術を行っています（図2f）。

図1：総手術件数

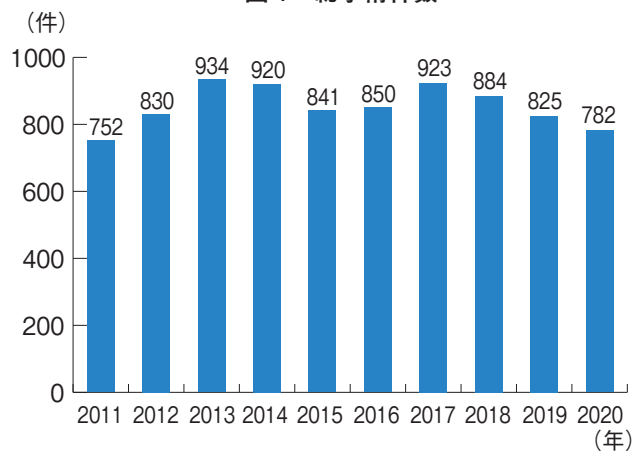


図2a：食道切除

